

明治32年に柳原町（崇仁地域）の町長であった明石民蔵らによって設立された柳原銀行。柳原銀行記念資料館は、その建物を移築・復元したもので、1997年の開館以来、地域の歴史、文化、生活資料を収集・展示してきた。かつて銀行であった建物には、現在、この地域にまつわる多様な記録資料が蓄えられている。本研究プロジェクトでは、柳原銀行記念資料館と連携し、資料館所蔵の資料に注目した実践的な研究を行っている。資料館＝「銀行」に貯蓄されている資料＝「記憶」をひとときの間お借りし、アーカイブ／ドキュメントについて、地域の歴史について実践的に考察していくプロジェクトで、「Sujin Memory Bank Project」と呼んでいる。

今年度は、2018年3月1日から4月22日にかけて、資料館所蔵の映画『東九条』を取り上げ、柳原銀行記念資料館を会場に上映展示「Memory Bank Project #02 BANK——映画『東九条』でつなぐこと——」を行った。1969年に公開されたこの映画は、「東九条では苦しい生活をさせられ、不当な差別を受けて暮している人人」がいるという「問題や矛盾」（映画の字幕より引用）を訴えるべく制作された自主制作映画である。監督・脚本を努めたのは、現在、柳原銀行記念資料館事務局長を務めている山内政夫。東九条というタイトルを冠しているものの、本作が主たる撮影地としているのは南北が八条通りと十条通りの間、東西が河原町通りと鴨川の間地域である。厳しい住環境や労働状況にカメラが深く分け入っていく。高度経済成長の豊かさとの対比のなかで、この地域に暮らす人々——「バタ屋」と呼ばれた廃品回収業者、子どもたちが遊びまわる様子、食事や買物といった、川沿いで営まれる日々の暮らし——が活写されていく。

ただし、今回の上映展示ではこの映画のメッセージを今に届けることに力点を置いたわけではない。企画を行うにあたり重視したのは、公開から半世紀という時間の中で本作が音声トラックを失っているという事実である。語りによる意味付けとBGMによる演出を喪失した本作は、人々の暮らしを淡々と映すのみであり、その結果、本作がかつて持っていたであろう告発のリアリティは影を潜めている。その代わりに前景化しているのが、当時の暮らしをうかがい知るための「記録」としての価値である。カメラは撮影者が意図したものだけを写すわけではない。たまたまカメラに写ってしまったものが、事後的に発見され、新たな価値を持つこともある。撮影者が当時、意図していたこととは異なる意味を半世紀後の観客が新たに読み込んでいくこと。声を失い、資料館に収蔵されることで、この映画は、告発のドキュメンタリーから新たな意味創出の資源としてのアーカイブへと変容しているのであり、本展ではこの変容自体を主題としている。

本作の上映展示を行うにあたり、撮影場所を巡る街歩きを行い、監督であった山内氏に、当時、8mmカメラを向けた場所と同じ位置からスマホのカメラで撮影を行ってもらった。そこで改めて痛感したのは、映像の中の街の様子が今日まったく変容してしまっているという事実である。この〈かつて〉の〈いま〉の間の時間——それは本作が告発のドキュメンタリーから記録、アーカイブへと変容した時間であり、監督を努めた山内氏が資料館事務局長へと立場を変えた時間でもある——を、声を無くした映画『東九条』は繋いでくれる。

本展が初日を迎える直前、映画『東九条』の製作に関わった人物の関係者から、資料館にオリジナルのフィルムと音声トラックが持ち込まれた。半世紀ぶりの上映というこのタイミングでオリジナルが持ち込まれたことには奇妙な因縁を感じざるを得ない。残念ながら劣化が激しく現時点での再生は困難である。今後は、オリジナルの状態での再生ができるよう、修復の道を探っていきたい。